

第35回

喜多流
青年能

日時：平成26年5月24日(土) 13:00開演(12:15開場)

場所：十四世喜多六平太記念能楽堂

主催：公益財団法人十四世六平太記念財団

西王母 (せいおうぼ)

中国・周の穆王の時代、雲客(宮廷に仕える全ての官人)や諸侯が集参し帝の仁政をたたえている。その宴の最中、桃花の枝を持つ美しい貴女が現れる。女は、三千年に一度花咲き実るといふ仙桃が今咲いたのも君の威徳によるものであるから、その桃を帝に献上しようと言う。それが名高い西王母の桃かと問う帝に女は初め答えなかつたが、やがて、自分こそがその西王母の化身であると告げ、この世を言祝ぐため仙桃の実を持って再び現れようと予言し、天に消えていく。(中入)

帝が管弦を奏して西王母の到来を待ち受けていると、仙桃の実を持つ侍女を従え、西王母が光輝く妙なる姿で現れる。喜びの酒宴にみな快く酔う中、西王母は仙桃を帝に捧げ美しく舞を舞い、やがて天上へと帰っていくのだった。

中国の伝説の仙女である西王母を主人公とし、前後とも祝福に満ち、優雅な舞の中に凜然とした趣をもつ能である。

野守 (のもり)

羽黒山の山伏が奈良の春日野を訪れ池水を眺めていると、一人の老人が現れる。山伏はこの池について尋ねると老人は、私のような野守の姿を写すので「野守の鏡」と呼ばれているが、真の「野守の鏡」というのはこの野に住む鬼が持つ鏡のことで、その鬼は昼は野守の姿に、夜には鬼の姿となつて塚に住んでいる、と答える。

さらに老人は「はし鷹の野守の鏡 得てしかな 思い思わず よそながら見ん」といふ和歌を引き、「はし鷹の野守……」の云われについて、『昔この野で御狩が催された時鷹を逃がしたが、この野の野守が指し示した池水の水面に鷹の姿が写つたことで行方が分かつた。』と語る。山伏は興味を示し、是非まことの野守の鏡が見たいものだと言うと、鬼神の持つ鏡を見れば恐ろしく思うだろうから、この水鏡を御覧なさいと言つて、老人は塚の中へ姿を消す。

(中入)

山伏が塚に向かって祈っていると、鬼神が鏡を持って現れ、その鏡に天地四方八方を写して見せ、最後には大地を踏み破つて奈落の底へと帰っていくのだった。

懐旧の思いを語る前半と対照的に、後半では万物を写す鏡を持ち現れる鬼神の豪快さが見どころである。

昔より鏡は不思議な力を宿すものとされ、すべてを写すことのできる鏡を持つて現れる鬼神は、「鬼」とはいうが、力強い美しさを持った神に近い存在である。

番組

嵐山 金子龍晟
雲雀山 狩野祐一

佐藤陽
塩津圭介
佐々木多門
佐藤寛泰

ツレ(侍女) 友枝 雄太郎
後シテ(西王母) 谷 友矩
前シテ(女)

能

西王母

ワキ連(侍臣) 矢野昌平
ワキ(穆王) 福王和幸
ワキ連(侍臣) 村瀬 慧

(大鼓) 大倉慶乃助 (太鼓) 金春國直
(小鼓) 田邊恭資 (笛) 藤田貴寛

間狂言(官人) 前田晃一

後見 塩津哲生
谷 大作

地謡
高林昌司 栗谷充雄
友枝真也 友枝雄人
佐々木多門 中村邦生
佐藤陽 内田成信

休憩二十分

狂言

宗八

シテ(料理人) 三宅右矩

アド(僧) 三宅近成
小アド(有徳人) 金田弘明

休憩十分

能

野守

ワキ(山伏) 村瀬 提

(大鼓) 亀井洋佑 (太鼓) 小寺真佐人
(小鼓) 住駒充彦 (笛) 杉信太郎

間狂言(春日の里人) 高澤祐介

後見 長島茂
佐藤寛泰

地謡
狩野祐一 高林呻二
大島輝久 狩野了一
栗谷浩之 栗谷明生
高林昌司 金子敬一郎

附祝言

次回喜多流青年能予告

平成26年9月27日(土) 12:00開演

能「田村」高林 昌司 ほか仕舞、狂言など
能「六浦」佐藤 陽
能「猩々乱」佐藤 寛泰

チケット

一般4,000円(前売3,500円)
学生2,500円(前売2,000円)

連絡先

十四世 喜多六平太記念能楽堂
品川区上大崎4-6-9/tel.03-3491-8813



十四世 喜多六平太記念能楽堂

※お客様専用駐車場はございませんので、お車でのご来館はご遠慮願います。